

般若理趣經・智友 Jñānamitra 釋 における一・二の問題

福田 亮 成

註釋者智友は、本註釋書が『デンカルマ目錄』（芳村氏編目錄 No. 523）に見えるので、當日錄制作以前に活躍した人と言える。チベットに傳わる歴史書には、智吉祥友 Jñānamitra の名のみが出ており、アティーシャ Atiśa をチベットに誘引した人とされ、智友と年代的ずれがある。（梅尾博士は『理趣經の研究』において同一人物としておられる）、又特に『ターラナータ』（シーフナー本 p. 188 寺本氏譯本 p. 324）には『金剛乘二邊遺道』vaira yāna-koti-dvayapohā-nama は、智吉祥友の著となつてゐるが、『影印北京版西藏大藏經總目錄』（p. 497 No. 4537）によれば、智吉祥 Jñānāśrī の著となつてゐる。こゝに智友・智吉祥友・智吉祥の三人が同一人物か、別人なのか、もう少し考察を必要とするので、こゝでは速断をさけておく。

本註釋書の構造は、むしろ『理趣經』の本文が引かれ註釋がほとこされてゐるのであるが、それに二つの方法があると言へる。即ち、一つは文章の細分がなされ、その各々に註釋がほとこされてゐるのであり。いま一つは出初めの文章と、終りの文少しと、眞言のみが引かれ、中間をあげてある長文に全體としての註釋がほとこされてゐるものであると言ふことが出来る。以上の方法で引かれる理趣經

本文は全部で七十を數えることができ、その内四十二の本文が理趣經初段にあたり、他の二十八の本文は二段以下に該當する。因みに引用本文を最初から①……⑦と番號をうち、全體に智友本と名稱を附して論を進めてゆきたい。

引用本文①～⑦は、藏文廣經（影印北京版 vol. 5 No. 119, 120）で言う「金剛薩埵の分別」にあたり、文章の前後、眞言の位置等の異なりがあるが略一致していると言つてよい。顯著な異なりは清淨句の數に於て、智友本では二十六の清淨句を數える。引用本文⑧は廣經に言う「如來の分別」にあたり、般若の理趣を金剛・義・法・一切の平等性という面から説いており、本文そのものも少しく異なるが註釋の部分に於て、その四つの命題を各々四部マンダラに配當している。引用本文⑨は、廣經はもとより他の類本にも該當の箇處なく、その註釋の部分から推則してもなを不明である。引用本文⑩は、廣經の「三界王の分別」にあたり、般若波羅蜜多を貪・瞋・痴・一切法の無戲論という面から述べ、註釋の部分で各々それを四部マンダラに配當している。なを末尾の眞言が異なる。引用本文⑪は廣經の「有情調伏の分別」にあたり、般若理趣を一切の欲・瞋・垢・罪・法・有情・智・般若波羅蜜多の清淨という面から説いて、註釋の部分で、それを四部マンダラとそれに對するユム (Yum) マンダラの八つのマンダラに配當している。引用本文⑫は、前の段に入るのでないかと思はれるのであるが、智友本の本文も眞言も該當する箇處がなく、註釋の部分もそれをうらづけうるものがなかつた。引用本文⑬は、廣經の「寶部の分別」にあたり、般若理趣を灌頂・財・法・資糧の施與という面から説いており、それを各々四部マンダラに配當して註釋している。引用本文⑭は、「その時

虚空藏菩薩は「寶三昧の眞言を説けり、*vajra trāṃ*」とあるが、これは廣經によると前の段の後半分を形成する文章に一致するが、智友本では完全に別の段を形成し空・無相・無願・無垢という命題を各々四部マंडラに配當している。しかしこの命題は、廣經の「文殊師利の分別」で説かれているものであり、その故に智友本では廣經の「金剛拳の分別」にあたる部分が存在しないことになるのである。引用本文①は、廣經の「文殊師利の分別」にあたり、特に前半分が抜けて、後半分を形成する文章に該當する。(以下略) 以上を因みに表にしてみた。(類本中に藏文廣經を選んだ理由は、各段に

藏文廣經	智友本
(1) 金剛薩埵の分別	①—②
(2) 如來の分別	⑬ × ⑭
(3) 三界王の分別	⑮⑯
(4) 有情調伏の分別	⑰ × ⑱
(5) 寶部の分別	⑲⑳
(6) 金剛拳の分別	㉑
(7) 文殊師利の分別	㉒①
(8) 金剛輪の分別	㉓②
(9) 虚空藏の分別	㉔③
(10) 金剛夜叉の分別	㉕④
(11) 部衆の分別	㉖⑤
(12) 外金剛部四マंडラ分別	㉗⑥ × ㉘⑧
(13) 般若波羅蜜多理趣	㉙⑦ × ㉚⑩
(14) 一切如來大樂金剛	㉛⑨ × ㉜⑪
祕密般若の門	㉝⑫ ㉞⑬ ㉟⑭ ㊱⑮ ㊲⑯ ㊳⑰ ㊴⑱ ㊵⑲ ㊶⑳ ㊷㉑ ㊸㉒ ㊹㉓ ㊺㉔ ㊻㉕ ㊼㉖ ㊽㉗ ㊾㉘ ㊿㉙

適當な名稱がついているからであることをこわつておく)となる。

以上七十の引用本文を註釋の部分のおぎないで大略智友本の推定が出来たのであつたが、④⑧⑨⑩⑪は上記の表でもわかる様に廣經を始め他の類本にも該當するところなく、「如來の分別」「有情調伏の分別」「寶部の分別」の各々が後半分を形成する文章なく、「金剛拳の分別」にいたつては完全に抜けていることがわかる。又⑬⑭には長行の眞言があるが、各類本には見ない。各段の末尾には眞言があるがその大部分が他の類本と異なる、特徴的な二十五般若咒も存在しない等々の智友本の特徴的な諸點をあげることが出来る。

この様なことから智友本を般若理趣經の第十一本目の類本として加えてみると、いくつかの問題點が現はれる、今はその一・二を述べてみよう。その一つは、理趣經は『理趣分』を最初として増廣されて略本が出来たとされているが、その説の有力な根據となつていた『理趣經・智友釋』に於て、上記の表のごとく金剛頂經十八會中第六會とみなされる廣本理趣經と智友が原本となした廣經とは少くとも異なるものであつたと言えるのであり、その事から現存の廣經までにそれ自身發展段階があつたのではないかと推測される。又もう一つは、廣本からの略本という事を智友本のみ限定してみると、そのチベット・中國の譯時等を考慮して、廣本の形をへないで廣本と同時に存在し、内容的には影響を受けながら發展・展開していつたということが、その異様なまでの讀誦の功德を強張する點から言つて十分考えられるのではないかと思う。(本當は智友本の譯文を全て出すべきであるがスペースのつごうにて割愛させていたゞいた)。